



Oracle Enterprise Manager

最新データベース製品のダッシュボード

ソリューションの概要 / 2020年1月13日

ORACLE®

大規模なハイブリッド・データベース・システムを少ない労力で管理する

International Oracle User Groupが最近実施した調査によると、DBAの多くは日常のメンテナンスやトラブルシューティングが必要な問題への対応に時間を取られすぎているため、問題が起こる前に、自らの裁量で重要なビジネス・システムを強化する方法を考えるための十分な時間を持つことができません。そこでIT業界は、テクノロジーのスキルに長けたリソースをもっと生産性の高い業務に充てるために、クラウド・サービスへの大々的な移行を開始しています。このような移行によって、多くの組織でハイブリッド環境が利用されるようになり、新たな管理ツールや運用方法が必要になっています。現在の組織では、リソースをクラウドに移行するプロセスを円滑にし、ハイブリッド環境の管理を簡便化するための汎用的なツールが求められています。

データセンターとクラウドの資産に対応する1つの管理ソリューション

オラクルの主力製品である管理プラットフォーム、Oracle Enterprise Managerを使用すれば、データセンターとOracle Cloudの両方で、すべてのOracleデプロイメントを1つのダッシュボードから管理できます。オラクルの製品スタックと密接に統合されたOracle Enterprise Managerは、Oracle ApplicationsとOracle Databaseインスタンス、およびその他のハードウェアやソフトウェア資産（ミドルウェアやエンジニアド・システムを含む）の管理を自動化します。お客様に信頼されるOracle Enterprise Managerは、以下の機能を備えています。

- 可視性の強化とインテリジェントな分析
- ライフサイクルの総合的な自動化と管理
- 安全で、アクセスしやすく、拡張可能なエンタープライズレベルの管理プラットフォーム

可視性の強化とインテリジェントな分析

近い将来、オンプレミスとクラウドベースのシステムが混在したIT環境が当たり前ものになるでしょう。Oracle Enterprise Managerがあれば、オンプレミスでもクラウドでも、オラクルの最新のテクノロジー製品群全体が十分に可視化され、インテリジェントな分析を行うことができます。以下のようなオラクルの最新のテクノロジー製品が総合的に可視化されます。

最近追加されたオンプレミスのターゲット	最近追加されたクラウドのターゲット
Oracle Database 19cとOracle Database 20、Oracle Exadata 19.3、Exadata X8M、Exadata XTストレージ、Oracle ZDLRA 19.3、Oracle WebLogic Server、Oracle SOA、Oracle Identity Management、およびOracle Business Intelligence EE12.2.1.4	Oracle Autonomous Database – 専用およびサーバーレスの両方（ATP-D、ATP-S） Oracle Autonomous Data Warehouse Oracle Exadata Cloud Service Oracle Exadata Cloud @ Customer

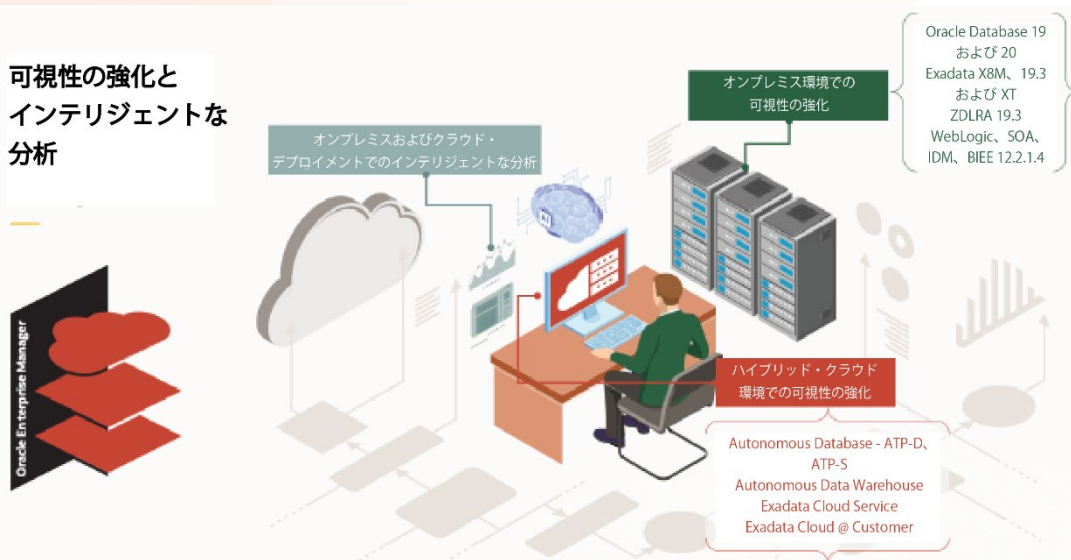
Enterprise Managerを使用する理由

- トラブルシューティングと分析に要する時間が短縮されるため、問題が発生する前からパフォーマンスと可用性を管理できる
- テストとプロビジョニングが自動化されるため、新しいアプリケーション・コードのリリースまでの期間を短縮できる
- 安全な構成が適用され、コンプライアンスが監視され、バッチ適用が自動化されるため、サイバー脅威が軽減される
- 移行のワークフローが自動化され、パブリック・クラウドの採用が短期間で進む

「当社はEnterprise Managerを利用して、Oracle DatabaseとExadata製品を最適化し、そのミッション・クリティカルなシェアード・サービスを、当社にとって重要度が非常に高いすべての事業に役立てています。Enterprise Managerの最新リリースによって、Exadata X8の最新の環境を遅滞なく導入し、Enterprise Managerの総合的な管理自動化機能を、当社のハイブリッドなデータベース製品全体で使用し続けることができます。」

*Link Group
Technology and Innovation
Division, Database Services
Manager, Jones John氏*

可視性の強化と インテリジェントな 分析



Oracle Autonomous Databaseをシームレスに管理する

自己管理型、自律型データベースの未来には、大きな注目が集まっています。とはいえ、テクノロジーに大きな変化が起きるとき、不確かであることにはリスクが付いてまわります。Oracle Enterprise Managerは、自律型データベースおよびクラウドのデータベース向けの、クラウド対応の種類ターゲット（Oracle Exadata Cloud Service、Oracle Exadata Cloud at Customerを含む）などの新しい機能を活用することで、ユーザーが自信を持ってOracle Autonomous Databaseを採用できるようにします。

Oracle Autonomous Databaseに移行した後は、ITスタッフはOracle Enterprise Managerを使い続けながらも、アプリケーションのチューニングや使用状況の管理など、もっと価値の高い業務に集中できます。Enterprise Manager Performance Hubに含まれる業界最先端のテレメトリによって、診断が簡単になります。ITスタッフは、Enterprise Managerコンソールから、ユーザー、スキーマ、ロール、ストレージ容量をシームレスに管理できるため、アプリケーションレベルのSQLロジックの診断と改善を行う時間を確保できます。また、Enterprise Managerを使用すると、クラウドネイティブのAPIを通して、サービスのインスタンス化、終了、スケーリングなどのライフサイクル操作を調整できます。

「私たちは、Oracle Enterprise Managerを当社のホステッド・データベース・サービスの一部として活用しています。Enterprise ManagerはOracle Autonomous DatabaseとExadata Cloudの最新バージョンに常に対応しているため、当社は最新かつもっともセキュリティの高いOracleテクノロジーをお客様に届けることができますし、自動化や分析の面で優れているため、少ない労力でサービスレベルの目標を突破することができます。」

*FORS
Technology Director,
Andy Tambovsky氏*

Oracle Autonomous Database のシームレスな管理

効果を確信した上でクラウドを導入

- 自律型およびクラウドのデータベース向けの、クラウド対応の新しい種類のターゲット（Exadata Cloud など）
- 企業全体を対象とした製品ダッシュボードで“ホットスポット”を検出

お客様が管理するコンポーネントの最適化

- 異常を自動検知する機能による監視
- ユーザー、スキーマ、ロール、容量などの管理
- アプリケーションレベルのSQLロジックの診断と改善
- クラウドネイティブのAPIを使用した、サービスのインスタンス化、終了、スケーリング、調整などのライフサイクル操作の自動化



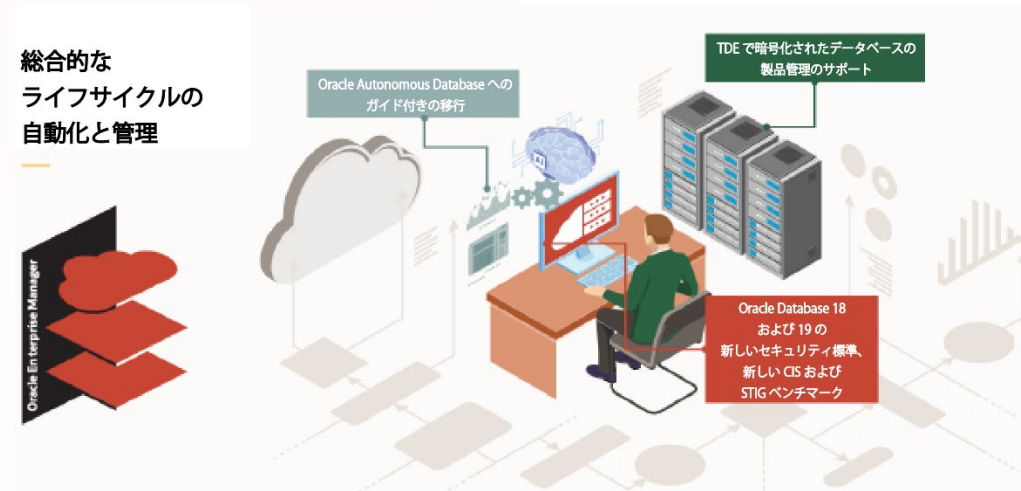
Exadataの利用を予防的に最適化する

Oracle Exadata Cloud Service、Oracle Exadata Cloud at Customer、Oracle Autonomous Databaseにデータベースのワークロードを統合しているお客様は、Enterprise Managerに搭載されている容量計画機能を使用して、オンプレミスとクラウドベースのワークロード移行計画を立てることができます。

新しいExadata Warehouseの機械学習ベースの予測機能を使用し、Exadataストレージ、セル、ホストの詳細なデータと、データベースのパフォーマンスのデータに基づいて、リソースの問題を見極めることができます。そうした分析結果を集めて外部のビジネス・インテリジェンス・ツールにインポートし、リソースの問題をさらに細かく調査できます。

ライフサイクルの総合的な自動化と管理

データベース環境が拡大すると、熟練したテクノロジー担当者の多くが、Oracle Enterprise Managerを使うようになります。Oracle Enterprise Managerはデータベースの診断、チューニング、監視を行う信頼できるツールであるだけでなく、多機能なライフサイクル管理のソリューションでもあります。Oracle Databaseと連携して、セキュリティ・パッチの適用、バージョン更新のロールアウト、データベースの統合と移行、データベース・リクエストの自動化など、日常的な管理タスクを自動化します。



調整の取れた計画、移行、検証：慎重さが肝心

クラウド移行ツールに慣れ親しんでおくことは、現在のデータベース管理者にとって重要な工程の1つです。自動化が進んでいるとはいえ、データベースのエキスパートたちは、自社のミッション・クリティカルなシステムが、新しいクラウドのレールで効率的に動作するという確信を持ちたがっています。オラクルは、クラウド移行ツールと、フロントエンドの計画ツールおよびバックエンドの検証ツールとを統合することで、そうした人々が確信を強められるように支援しています。

Oracle Enterprise Managerには、Oracle Autonomous Databaseのようなクラウド・データベースと関連付けられた管理構造と新しいAPIを備えるMigration Workbenchが含まれています。Migration Workbenchは計画サイクルを自動化し、DBAが移行対象となるデータベースを決定するのを助け、それぞれの移行にもっとも適した移行ツールを選択し、データベース内の既存の依存関係を特定します。たとえば、Migration Workbenchを利用して、どのデータベースがOracle Autonomous Transaction Processingともっとも相性が良いかを判断できます。また、移行プロセスを計画し、ふさわしい移行方法を使ってデータを移行し、移行前と移行後のパフォーマンスを比較して結果を検証できます。問題なく移行が完了したら、管理タスクの実行を自動化できます。Enterprise Managerが適切な移行ツールを起動し、ワークロードを移動し、新しいクラウド環境ですべてが正常に動作していることを検証します。

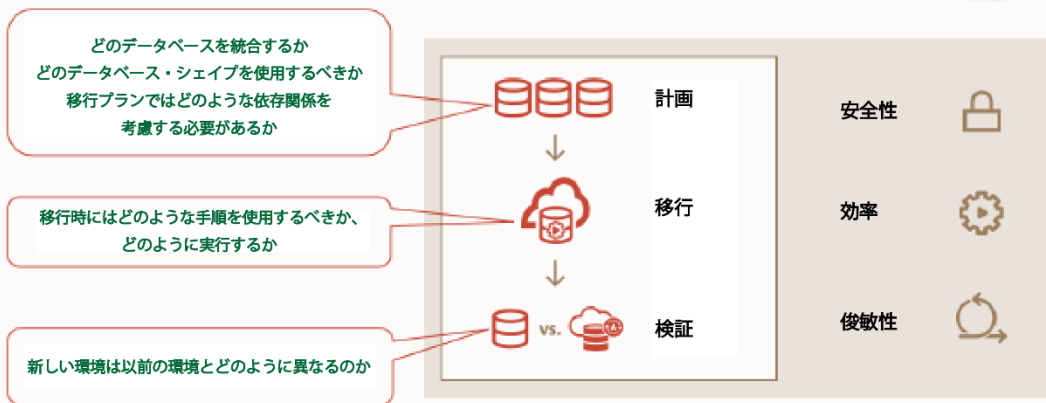
「Oracle Enterprise Managerは長年、Oracle Database向けの製品として最高レベルの管理機能を提供してきました。当社のお客様がデータベースをクラウドに移行することが増えるにつれて、リスクと労力を最低限に抑えて移行を成功させるために、Enterprise Managerがお客様の移行ソリューションとして使われているのは当然のことです。」

Compassio
CEO, Ernest Molinaro氏

「私たちはOracle Enterprise Managerを使って、当社のお客様、たとえばUnicoop FirenzeによるOracle Autonomous Databaseへの移行と、同製品の利用を支援しています。Oracle Enterprise Managerの最新リリースでは、同種製品の中で最高レベルの、オラクルによる自動化と分析機能が活用されており、当社のお客様はもっとも重要な資産であるデータのパフォーマンスとセキュリティを確保できます。」

Bridge Consulting, S.R.L.
CEO, Marco Bettini氏

Migration Workbench による Oracle Autonomous Database への簡単な移行



Migration WorkbenchをOracle Autonomous Databaseと組み合わせると、移行を滞りなく、安定した状態で行うことができます。そのプロセスには、以下の3つのステップがあります。

- **計画**：まず、移動や統合が必要なデータベースを特定して、どのような種類のクラウド・データベースを使用するかを決定します。Topology Viewerは、アプリケーション内のデータベースの依存関係を特定するのに役立ちます。またConsolidation Plannerは、使用容量の履歴を分析して、クラウドにどの程度の容量が必要であるかを見積もり、その容量をクラウドのリソースにマッピングします。
- **移行**：Migration Workbenchは、移行元と移行先の構成に基づいて最適な移行手順を決定し、その手順を実行する方法を提示します。
- **検証**：移行が完了すると、すべてのオブジェクトが問題なく移行されたことをEnterprise Managerが検証し、移行元と移行先のスキーマを比較して、移行の成功度を測定します。この工程によって、オンプレミスで使用されていたすべてのオブジェクトが、クラウドに正常に移行したことを確認できます。また、各ワークロードの移行前と移行後のパフォーマンスを比較して、必要に応じてチューニングすべき点を提案します。

総合的な自動化と管理でセキュリティ対策の効果を最大化する

Oracle Enterprise Managerは、オンプレミスかクラウドかを問わず、お客様のデータベース管理システムに自動でパッチを適用し、システムを更新して、業界および企業の要件に準拠した状態を維持します。最新のソフトウェア・パッチを常に適用しておくことは、セキュリティ上必須の対策です。オラクルは、Security Technical Information Guide (STIG) やComputer Information Security (CIS) Benchmark v2.1.0, Level 1-RDBMSなどの関連する標準規格、またOracle Database 18cおよび19c向けにオラクルが提案するベスト・プラクティスについての情報を集め、それらに準拠しています。

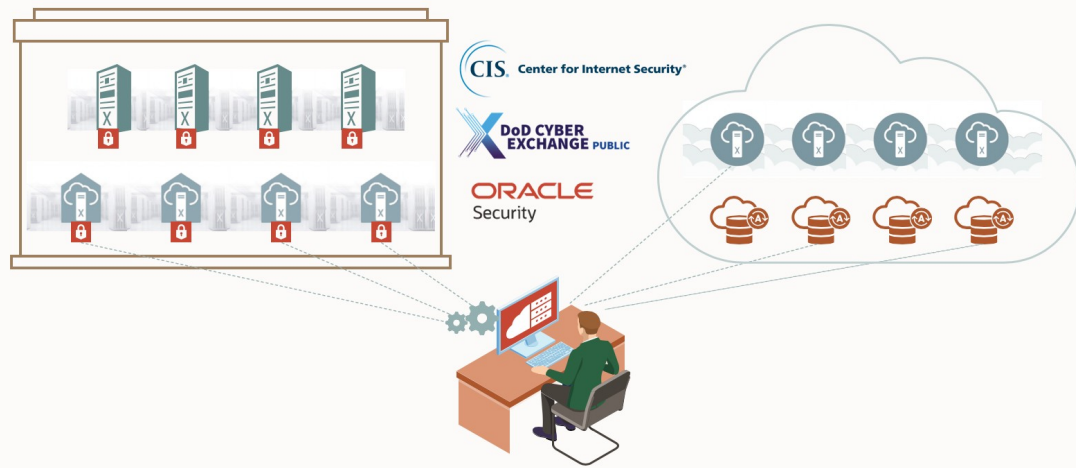
「当社のお客様は、Oracle Cloudへの移行、特に新しい自律機能を使えることを喜んでいきます。当社はお客様が一段と早く移行を完了できるように支援するため、新しいOracle Enterprise Manager Migration Workbenchを使用します。自動化によって効率が上がり、製品が備える検証機能およびベスト・プラクティスによって、確実に移行を成功させることができるからです。」

Collier IT
CEO, Brian Bream氏

「私たちの重要顧客である公共部門と一般企業、そして当社のエキスパートも、日常的にOracle Enterprise Managerを使用してOracle DatabaseとExadataの製品を管理しています。Enterprise Managerの新バージョンのおかげで、Autonomous Databaseに移行しやすくなり、Enterprise Managerのデータに機械分析を適用できます。これこそ、当社のお客様がデータベース製品群全体でシームレスな運用を続けるのに必要とするものです。」

Mythics
Transformation, Vice President
、Erik Benner氏

総合的な自動化と管理でセキュリティ対策の効果を最大に



「Oracle Enterprise Managerは、オンプレミスでもクラウドでも、企業データのセキュリティを確保する重要な管理機能を備えています。同製品の新しい機能によってデータ暗号化の使用が増え、当社のお客様は、オラクルとサードパーティによる新しいコンプライアンス標準を利用して、データセンターでもパブリック・クラウドでも、セキュリティ対策の効果を最大化できます。」

*Kapstone
CEO, Pravin Patil氏*

クラウドで利用できるエンタープライズレベルの管理フレームワーク

多くのDBAがOracle Enterprise Managerを使って、日常業務を着実に自動化しています。今は新しいモバイル・インタフェースのおかげで、インシデントの通知を受け取り、対応することが容易になっています。さらに、新しいGrafanaのプラグインがあれば、管理者はGrafanaユーティリティを使って、時系列のデータを分析して監視でき、そうした作業はすべてOracle Enterprise Managerコンソールから実行できます。OAUGの調査によると、DBAは統一された管理インタフェースを使用することで、進化をもたらすオラクルのITロードマップへの信頼を強めることができ、クラウドベースのデータベース、アプリケーション、インフラストラクチャの導入に向けて地ならしができます。統一された管理によって、優れたパフォーマンスで結果を出し続けることができます。

エンタープライズレベルのフレームワーク：安全で、アクセスしやすく、拡張可能



「Epsilonは世界的に有名な多くの企業に対して、マーケティングとロイヤルティのプログラムを展開しており、Oracle Enterprise Managerを活用して最高レベルのパフォーマンスを維持しています。当社はすでに、Enterprise Managerの自動化機能を大いに利用し、Enterprise Managerのデータに対して高度な分析を定期的に行っているため、新しい移行ワークフローを活用し、高度なExadata分析機能を、新しいGrafanaプラグインと併せて使うことを楽しみにしています。」

*Epsilon
Database, Senior Director,
Joe Kopilash氏*

オラクルの主力製品である管理ソリューションを、クラウドとオンプレミスのシステムがあるハイブリッド環境で採用することは、かつてないほど容易になっています。Oracle Enterprise Managerは、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Marketplaceで動作します。このターンキー方式によって、定義済みのOracle Cloud Marketplaceイメージから、高可用性 (HA) インフラストラクチャを簡単にデプロイできます。数回のクリックで、オラクルのベストプラクティスに従ってEnterprise Manager環境を稼働させることができます。OCI Marketplaceでこのサービスをサブスクライブすれば、数分で準備が完了します。

まとめ：テクノロジー・スタック全体を管理する

Oracle Enterprise Managerは、さまざまなハードウェアとソフトウェアのインフラストラクチャで構成されるハイブリッドなデータベース環境で、課題に立ち向かう組織を支援するために作られました。Oracle Enterprise Managerを使用すれば、定評のある管理の運用方法を自信を持って採用し、次世代のテクノロジー・イノベーションを活かして、ビジネスの目標を効率的な方法で達成できます。

Oracle Enterprise Managerについて詳しくは、<https://www.oracle.com/enterprise-manager/>をご覧ください。

ORACLE CORPORATION

Worldwide Headquarters

500 Oracle Parkway, Redwood Shores, CA 94065 USA

海外からのお問い合わせ窓口


電話 + 1.650.506.7000+ 1.800.ORACLE1

FAX + 1.650.506.7200

oracle.com

CONNECT WITH US

+1.800.ORACLE1までご連絡いただくか、[oracle.com](https://www.oracle.com)をご覧ください。北米以外の地域では、[oracle.com/contact](https://www.oracle.com/contact)で最寄りの営業所をご確認いただけます。

 blogs.oracle.com/oracle

 facebook.com/oracle

 twitter.com/oracle

Integrated Cloud Applications & Platform Services

Copyright © 2020, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved. 本文書は情報提供のみを目的として提供されており、ここに記載されている内容は予告なく変更されることがあります。本文書は、その内容に誤りがないことを保証するものではなく、また、口頭による明示的保証や法律による黙示的保証を含め、商品性ないし特定目的適合性に関する黙示的保証および条件などのいかなる保証および条件も提供するものではありません。オラクルは本文書に関するいかなる法的責任も明確に否認し、本文書によって直接的または間接的に確立される契約義務はないものとします。本文書はオラクルの書面による許可を前もって得ることなく、いかなる目的のためにも、電子または印刷を含むいかなる形式や手段によっても再作成または送信することはできません。

OracleおよびJavaはOracleおよびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称はそれぞれの会社の商標です。

IntelおよびIntel XeonはIntel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARC商標はライセンスに基づいて使用されるSPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴおよびAMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devicesの商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。0120

ホワイト・ペーパー Oracle Enterprise Manager

2020年1月著者：

David Baum

ORACLE®